

民主の父
尾崎行雄物語

眞 下 五 一 著



目 黒 書 店

民主の父
尾崎行雄物語

目黒書店



尾崎行雄物語

昭和二十六年一月十日印刷
昭和二十六年一月十五日發行

定價一五〇円

著者 真下五一

発行人 目黒謹一郎

印刷者 横山要太郎

東京都千代田区神田駿河台三ノ一
東京都中央区日本橋茅場町二ノ十

發行所 東京都千代田区神田駿河台三ノ一
目黒書店

はじめの言葉

悪い夢からさめた新生日本は、一にも二にも民主々義、自由思想をとなえるようになってきました。あの狂気沙汰のような暗黒の時代から思うと、正に隔世の感があります。

けれども、今日その自由民主のお題目に、本当に心の底から板についている人が幾人あることでしょうか。

口先と、うわべだけの民主々義、責任のともなわない自分勝手な自由思想、そんなあさはかな、表面だけの目覚めようでは、まだまだ平和世界の一員として、手をつないでいくには末遠いことといわねばなりません。

それでは、この理想になつた人は、今日の日本には一人もいないでしょうか。ところがあるのです。しかも正に世界的な人物があるのです。その人は、終生一貫、あのいまわしい暗黒時代の強圧政治の中にあつた戦時中も、一步もこの信念から

くずれることなく、真の自由、真の民主的平和の大道をつらぬき通してきたのです。それこそは誰あろう、生きた日本のほこり、尾崎行雄なのです。

アメリカでは、あの大战の最中ですらも、反面では、この人ある日本を尊敬してくれました。

またイギリスでも、長年、議会にその名をつらねた政治の功労者を「議会の父」といつて尊敬していますが、尾崎行雄のように、国会開設以来、今日にいたるまで、一時も缺けることなく、その議席を持ちつゞけてきた人は、世界にもその例をみないことで、正に、富士山以上に生きたほこりというべきでしょう。

この先覚者、この不断の実行者ある故に、日本は、あの暗黒の中から、今もなお、希望の光を残し、持ちつゞけていくことが出来たのでした。

今や日本中が、この一つの正しい流れに、さおさしはじめていることは、どんなにかよろこばしいことですが、われわれは、その同じ船中であって、この得がたい船頭の心を、今こそ、自分の心にしっかき学びとるべき必要があるのではないでしようか。

ところで、今や百才の年も近づく、この偉大な尾崎行雄翁にも、皆さんと同じように、少年時代があったことです。

しかも今日よりも、もっともつと困難な封建と強圧の社会に育ってきた少年行雄が、どんなに貧にたえながら、その苦しみを征服し、理想の光を求めて、学びとってきたことでしょう。

その生いたちの中には、思わずページをくるほどに面白いところが沢山あります。が、たのしく読んでもらいつゝも、私は今日の日本の少年少女の皆さんに、何よりの大きな力づけとしたいと思って筆をとめたのが、この物語なのでした。

皆さんは、あのアメリカのポートマック河畔に、戦前、戦時、戦後を通じて、咲きほこっている日本の櫻のことを知っているでしょう。

あの櫻も、尾崎行雄が、その東京市長時代に心をこめて贈ったものでした。

春めぐりくれば、自然のまゝに咲き初める無心の花の美しさ。あゝ何というよろこばしい親善の風景でしょう。その花の姿に、尾崎行雄は生きているのです。というよりも、その花の心の中にこそ、永遠の理想が香っているというべきでしょう。

目次

一	鼻 はな の無い顔	九
二	くそ蛙 がき の教え	一七
三	美少年の友	二六
四	意外 いがい な芝居 しはい	三六
五	涙 なみだ は露 つゆ か	四六

六 無言戰法…………… 六

七 災難旅行…………… 六

八 論より実行…………… 九

九 福沢先生と鼻毛…………… 七

十 少年主筆…………… 七

十一 とびそこなつた首…………… 一六

十二 馬車に乗った、にせ大臣…………… 二七

十三	命からがらの上陸……………	二七
----	---------------	----

十四	自由の國……………	二八
----	-----------	----

十五	第一議會……………	一四
----	-----------	----

十六	ボートマック河畔の櫻……………	一五
----	-----------------	----

尾崎行雄物語

一 鼻のない顔

空には飛行船型の雲が浮いている。周囲の山々からはもう小鳥たちのさえずりが聞かれ、すっかりと晴れ上つてはいたが、風はまだ寒い。

病身な父は、もう先に湯の中にひたつて（お前も早くはいらないか）というような顔をしてこちらを向いている。

だが行雄は、何だかこの不潔そうな野天の温泉に入る気がしなかった。

父も病身な上に、行雄もまだ頭のいたくなかった日が一日もないほどに、弱い体だったので、一家そろって、草津の温泉に静養にやってきたのであるが、どうもこの大道にただ屋根をかまえただけの温泉では、進んではいる気がしなかったのである。

それで行雄が、わざとぐず／＼していると、とう／＼思いあまつた父が、湯から上つてきて、

「早く裸にならぬか。苦しいそがしい生活の中で、お前の体のためも思ってきた温泉ではないか、ありがたいと思つて、早くはいれ……」
といいざま、行雄のかたくむすんだへこ帯をほどいて、むりやりに裸にしてしまったのである。

「はいるよ〜。あゝ寒い……」

真裸にされてみると、さすがに寒く体がさむい。ぼだらけになってやり切れなくなつたので、とうとう行雄も、ざんぶと、湯の中に飛込んでしまった。

でも思い切つて、いったん湯の中にはいつてしまうと、自然なあたゝかみを持った温泉は、心地よく肌をあらつてくれる。

「こんな入浴だけで体が丈夫になれば、けつこうなことだね、ね、父さん……」
現金にも行雄は、もうそんな口を利きながら、泳げないなりに、広い湯の中で、抜き手を切つてみたりした。

と、ゴブ〜と泡を立てながら、湯の中をくぐりぬけて、ボンと頭をもたげた時である。

モーモーと立ちこめている湯気のために、そこらの入浴客の顔もよくみわたせないのだったが、ゴッンと頭がぶちあたったひょうしに、

「あッ、すみません！」

といって、その人の顔をみると、驚いてしまった。

その人の顔の真中には、あるべきはずの鼻がないのである。くさった無花果いちじぐのようにはれ上った顔には、ただ、くずれた鼻のあとらしい穴が、二ツひんまがっているだけだった。

しかも、その顔が、ただニタ／＼と笑って行雄のやんちゃんふるまいを、面白そうに見守っているだけだった。

「ヒヤーツ」

思わず悲鳴ひめいをあげかけた行雄は、夢中むちゅうでその場を飛びのいて、父の姿すがたを求めて、また泳ぐように湯をかきわけていった。

「あッ、お父さん！」

何かを訴えうったえようとして、湯気の中に父らしい体をみつけて寄よっていくと、その人も

また父ではなく、同じように鼻がくずれ、頭の毛は全然抜けおちた上に、ボン／＼と穴があいているのだった。

それで気がついてみると、そこらの洗い場などに長く寝をべっている人や、湯のふちに腰かけている人々も、皆身体が薄紫色にただれたりくさつたりしている者ばかりだった。

（これはどうしたことだ……）

行雄は余りのことに声がしびれてしまい、

「お父さん、お父さん！」

と、よびつゞけている声も自分には聞えないほどだった。

「お父さん、僕もう上るよ！」

そうよびかけたまゝ、ほうほうのていで湯から上ると、いちもくさんにかけて出していつて山の崖から出ている清水のところへいき、夢中でその冷水を頭からかぶった。まるで、よごれた羽根を、水たまりで洗う小鳥のように、体全体をバタ／＼と洗

いで、洗い清めたのである。

清水は身を切るほどに冷たかったが、行雄はその間、全然冷たさを感じなかったほどである。

「あゝおそろしかった。あゝいやだ。もう二度と、あんな温泉に入るものか」
行雄はいそいで着物をきると、もう父にかまわず引上げてしまった。

父はそれから三十分ほどして、ゆっくり湯ほてりした体で帰ってきたが、

「行雄！ お前の入浴は鳥の行水だな。」それではせっかくの霊泉も体の中までしみ通っていく間もないよ……」

と、たしなめたが、行雄はもうコリコリで、そういう父の顔までが、どこか今の鼻のない人に似てきたような気がするほどだった。

「だって、あれ以上はいっていたら、鼻が落ちてしまいますよ。あちらみても、こちらみても鼻のない人ばかりですもの……」

「うん、あれは癩病患者だな。今のところとりしまりがないものだから、いっしょに入浴するんで、これはこまつたものだな。……でも、霊泉のことだ。めったにうつることはないよ……」

さすがに父も、ちよつと、こんわくした表情だった。

だが、それ以来、行雄は、いかに父がすゝめても、もう絶対に入浴しなかった。いったん決めたらてこでもはいらぬという、行雄の性質をよく知っている父は、それ以上はもうどうすることも出来ず、自分だけはそれから根気よく毎日入浴をつづけていった。

そんな間にも、せまい木賃宿で行雄は早くここを引上げたいばかりの日々だったが、父はせつかく賜暇をいただいたんだから、その間中に体を元気に快復しときたいといつて、一ヶ月間も頑張り通すのだった。

「あゝ、やり切れんく」

行雄は、人間の顔をみたくないと、しかたなしに毎日山へ出かけて、小鳥のさえずりを聞いてくらしした。

そして、陽ざしのよい枯芝の上などに終日ねころんでまどろみ、晝の食事もうくにとりに帰らないことも多かった。

何より自然がいい。温泉に罪はなく、人に罪があるのだが、山々の姿はゆたかに行